

■ コロナ禍を通じての変革

井上 晋*



ここで改めていうまでもなく、2020年は新型コロナウイルスの蔓延により、全世界が翻弄された年であった。本原稿を書いている12月時点でもその勢いはとどまることなく、わが国では感染第3波の真ただ中にあり、大都市圏では不要不急の外出の自粛要請も再び出され始めている。

プレストレストコンクリート工学会(以下本工学会)も2020年はさまざまな意味で変化・変革を迫られた1年であったといえる。緊急事態宣言が出された4月以降、5月の総会は大幅に規模を縮小して開催にこぎつけたものの、本工学会の主要行事のひとつである6月のPC技術講習会をはじめとする各種講習会は中止または延期となり、7月に予定していたコンクリート構造診断士試験も中止とした。本工学会の財政状況を考慮すれば大きな痛手ではあったが、今考えると適切な判断であったといえる。

感染拡大の第1波が収まった6月以降、秋の主要行事の開催可否に関する検討に入ったが、理事会や各種委員会をすべてメール審議とするわけにもいかず、遅ればせながら本工学会でも7月にウェブ会議システムを導入した。慣れないなか、事務局には会議運営に際して多大なるご負担をおかけしたと思う。現在はほとんどの会議がこのシステムを利用して行われており、初期導入・運用コスト以上の旅費削減につなげていければと考えている。

秋以降の主要行事のひとつであるPCの発展に関するシンポジウムは、オンデマンド方式によるオンライン形式で実施することをシンポジウム実行委員会で決定し、予想を上回る参加者を得て10月29、30日に無事開催することができた。また、PC技士試験に関しては、その講習会を9月にライブ配信によるオンライン形式で実施し、試験は10月18日に十分な感染防止対策をとったうえで東京・大阪・福岡の3会場で予定

どおり実施した。これらをとくに問題なく開催できたのは関係各位のご尽力によるところがきわめて大きく、改めて御礼申し上げたい。

さて、上述の2つの行事に参加いただいた方々にはその実施方法などについてアンケートにご回答いただいた。まず、PC技士試験講習会についてであるが、運営や内容に関してはほぼ満足という回答が得られたものの、今後の開催方法については東京参集型を希望された方はわずか5%にとどまり、オンラインまたはハイブリッド(オンライン・参集併用)を希望される方が大半を占める結果となった。また、オンラインを希望する方の70%程度がライブ配信よりもオンデマンド形式を希望されていた。

一方、PCの発展に関するシンポジウムに関しても、運営や内容に関して否定的な意見はほとんどなく、一定の評価をいただいたと考えているが、今後の開催方法に関する質問では、70%以上の方が現地開催がよいと回答され、「PCに関わる技術者が一同に会し、知識・技術の交流を深める」ことがPCシンポジウム開催の意義のひとつであるということを確認することができた。

本工学会の公益社団法人としての役割を考える場合、とくに1か所現地参集型で実施している講習会については、参加者サービスという観点からも、今後はハイブリッド型の開催を視野に入れた検討が必要になってくるであろう。いずれにしても、参加者からいただいた貴重な意見を参考にするとともに、コロナ禍により凶らずも得られた運営に関するさまざまなノウハウを利用して、予測不可能な今後に対処していきたい。

今後とも関係各位のさらなるご支援とご指導をお願いする次第である。

* Susumu INOUE : 本工学会会長
大阪工業大学 工学部 都市デザイン工学科 教授